

「森銘三刈谷の会」だより 48(2026/1/17)

発行 2026/1/17 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銘三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp



三和 作 政よし 画『再会親子錢獨樂
3巻』, つたや, [寛政 5 (1793)]. 国立
国会図書館デジタルコレクション
より、左図：3巻のうち上巻の絵題簽



右図：両替屋山岡の店先

48:2025/11/15(土) 森銘三 (1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子錢獨樂』(寛政5年、出版つたや)を読もう (参加13人)

森銘三と唐来三和

森銘三は1933年(38歳)、東京帝国大学史料編纂所に勤めながら、帝国図書館に通い、黄表紙を読み漁っていた。その時の様子は『日本及日本人』に「読書日記」として連載された。9月には唐来三和の黄表紙を続けて読んでいる。「秘かに思ふ、黄表紙の作家中京伝につぐものは参和(三和)ならずやと」と言い、「『再会親子錢獨樂』大いによし」と評価している。翌34年2-5月号の『歴史と国文学』に発表した「黄表紙作家としての唐来三和」はその調査のまとめである。

筆者は2016年の西尾市岩瀬文庫の企画展で『再会親子錢獨樂』を初めて目にした。離れ離れになった錢の親子三人が、様々な人の手に渡って使われる画は、森三郎が『赤い鳥』1934年8月号に発表した童話「めぐりあひ」の錢の使われ方と酷似している。作品の発表年月から三郎の童話は兄・銘三の論文の影響ということが分かり、いずれ森銘三刈谷の会で唐来三和『再会親子錢獨樂』を取り上げたいと思ってきた。

今年はNHK大河ドラマ『べらぼう～薦重栄華乃夢嘶～』で薦重や黄表紙作家たちが登場しており、よい機会であった。折りしも11月15日の会の2週前11月2

日「べらぼう」第42話では、滝沢瑠吉(のちの馬琴、当時、つたやの手代)が唐来三和に「武家戯作者の先達として諸事ご教授願いたい」と声をかける場面目にしたばかりであった。

『再会親子錢獨樂』は「三庄(山庄)大夫」の母子(北の方、安寿姫、対王丸)の別離-再会の話と、『搜神記』(中国、六朝時代の小説集)にある子母錢(青蚨の血を塗られて戻ってくる錢)の伝説とを結びつけた話である。人買の山岡は親子を売って得た金を、子母錢の力で増やし両替商になる。店先に子母錢の精が現れ、人の目には見えないが、四文錢を母、耳白錢を姉、銭錢(ずくせん)を弟とし、別れ別れの日々が始まる。顔には母・姉・弟の文字が描かれ、着物はそれぞれの特徴で母は青海波、姉は文、弟は小の文字が描かれている。北尾政美(まさよし)の画で、場面とどの錢が何に使われたかを見ていこうと計画していたが、参加者の中には古文書研究会のメンバーも多く、文章もきちんと読んでいこうということになった。

後に示すように、DykesさんはAddisonの「THE ADVENTURES OF A SHILLING」(1710)との比較を提起している。明治になって坪内逍遙は「THE ADVENTURES OF A SHILLING」と「再会親子錢獨樂」を結びつけて「一円紙幣の履歴ばなし」(1890)を書いている。銘三もこの書について触れている。詳細は後の会に譲るが、楽しい発展が続きそうだ。

国立国会図書館デジタルコレクションの「再會親子錢獨樂」は4Kだ

鈴木 哲

三和[作], 政よし[画](1793)「再會(めぐりあふ)親子錢獨樂」つたや出版を国立国会図書館デジタルコレクションで見てみた。その解像度の高いこと、拡大してもぼやけない。巻1:2ウ「月参」も、1:3オ「弟」も、読める(文字は拡大しても「読める」わけではないが)。

「再會」は神谷(2017)「森銘三・森三郎兄弟と刈谷」刈谷市郷土文化研究会『かりや』38:65-78にやや詳しい説明がある。表題に「再會」がないため、気付かれた方は多くないと思う。「再會」序文の「孔方兄」は、日国(1980, 4:599)に立項があった。「孔方」は方形の穴の意、「兄」は親しみを表わす、「ぜに(錢)」の異称とある。

唐来三[参]和(1744-1810)は鳴屋重三郎(1750-97)に6歳長じ、鳴重後13年生き、狂歌は大田南畠(1749-1823;四方赤良)についたことも知った。新春の「再會」続編が楽しみである。

楽しみな森三郎「めぐりあひ」との関連

河橋 育実

今回の黄表紙「再會親子錢獨樂」は森三郎の「めぐりあひ」の元の作品と聞いていたので楽しみにしていました。「めぐりあひ」は四文錢の兄がいろんな人の手に渡り酷い思いをしてもとの両替屋に戻ると、同じような思いをした二文錢の弟と再会をしてもう二度と離れないようにくついたら、店の主人が縁起が良いと娘に渡したというお話しでハッピーエンドなので好きな作品のひとつです。

会では訳文じゃなく黄表紙の文字を読みました。私は読めない文章を会のメンバーは苦も無く読んでいて改めて尊敬しました。次回も読み進めるそうなので楽しみです。

「THE ADVENTURES OF A SHILLING」とのつながり

David Dykes

今回の「森銘三刈谷の会」のテクストは非常に興味深いものがありました。

字もろくに区別できない部分が多く、1月までの時間を生かして、同じ様な資料でもう少しトレーニングしなければなりませんが、「おもて」と「うら」、2ページずつで進んでも可能なので、苦しむ時間がいつも限定されています。耐えられない気分になる心配はむしろないです。そして、完全にピンとこないところは、まずそのままにしておいてもいいです。

中国からの影響が多いと皆さんはだいたい同感していたようですが、中国からの繋がりを認めて、「THE ADVENTURES OF A SHILLING」(1710)の例を見る限り、よ

り遠い文化圏との類似があり得ないという結論には必ずしもなりません。そして、多文化との接触は日本国内で終わるというわけには限らず、ポルトガル領土澳門や開放港広州でも、似た話が必ず交換されていました。マニラでも、メキシコでも、オランダでも。

詩趣のある簡潔な文章と好ましい絵に引かれた森銘三

飯田 芳子

唐来三和著・北尾政美絵の『再會親子錢獨樂』を読むことになった。が初見ではまことに読みにくくて閉口した。

神谷磨利子さんのレジュメは、その苦役を補うのに正に懇切丁寧な案内役として大いに役立つものであった。ただ本当に楽しむなら、地口(成句と似た発音の文句、馳洒落の一種)や隠語を理解する事が必要に思える。私はざっと読んでも解らなくてはも閉口する一因となった。

ところで序にある『搜神記』と説話として人口に膾炙した『山椒大夫』を結び付けた物語であるから、擬人化された錢の末は巡り合う定めのその途上の動きと使われ方に、詩趣のある簡潔な文章と好ましい絵も相まって人々を引き付けたのだろうと思った。レジュメにある「読書日記」「日本及日本人」に鉄拳子の署名で連載がある。昭和八年九月十日の頃に、終日図書館。唐来参和大いによしと見える。P3では黄表紙作家として唐来参和の良さを挙げている。豊富な知識を以てして銘三が楽しんだ様子がうかがえる。

番外編 NHK大河ドラマ(2025)「べらぼう」の大田南畠

鈴木 哲

第33回(2024/6/15)「森銘三の百科事典項目『大田南畠』」で、NHK大河ドラマ「べらぼう」に南畠が登場するのではないかと述べた。2025/9/9岡崎で話をする機会があり、上田秋成(1776)「菊花の約」と[伝]南畠辞世句「今まで人はのことだと思ふたに俺が死ぬとはこいつはたまらん」を紹介した。「べらぼう」第45回(2025/11/23)「その名は写樂」で同句が紹介され驚いた。会のおかげで、南畠や唐来三和、山東京伝など「べらぼう」の登場人物に親しみがわく。まさに、べらぼうである。

予定

2025/12 休会でした。

49: 2026/01/17(土): 第1会議室: 神谷磨利子

「『再會親子錢獨樂』を読もう」No.2

〈関連行事〉 2026/01/18(日曜) 刈谷市郷土文化研究会

第4回談話会 長鳴秀雄「森銘三と三河人~『土木請負師服部長七』を通して~」 [視聴覚室]

50: 2026/02/21(土): 第1会議室: 「『再會親子錢獨樂』を読もう」No.3

51: 2026/03/21(土): お申し出下さい。